

國學院大學學術情報リポジトリ

東四柳史明編『地域社会の文化と史料』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菱沼,一憲, 坂本,達彦, Hishinuma, Kazunori, Sakamoto, Tatsuhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000438

書評と紹介

東四柳史明編

『地域社会の文化と史料』

菱 沼 一 憲
坂 本 達 彦

本書は、金沢学院大学名誉教授東四柳史明氏の古稀を祝い編纂された論文集である。氏は國學院大學文学部史学科に入學し日本中世史を学ばれると、一九七五年、故郷である石川県教育委員会文化財保護課に奉職され、以後現在にいたるまで石川県を中心に、公私にわたって歴史学の普及と発展に寄与されている。ことに、石川県立図書館では『加能史料』の編纂に長く従事され、大学では地方史研究会・石川県では加能地域史研究会を組織して活発な研究会活動にはげまれた。そうした研究活動は、地域の歴史研究のみならず、全国的な歴史学の発展に寄与するものであり、そこで生み出された人と学問の輪が結実し、この論文集の刊行にいたったといえよ

う。

本書には古代から近世までの論考を、四部にわけて二四編が収められている。

序―本書の意図と構成―

第Ⅰ部 古代中世の地域と領主

ヤマト王権とコシ

能登邑知湯周辺の古代交通路

南北朝期における八戸根城南部氏の動向

管領家畠山氏の内訌と能登守護家

中世加賀国長崎保の成立と領有関係

第Ⅱ部 中世社会の文化と史料

『天文日記』の記号覚書

加賀国金津荘の荘域と相論

戦国期の加賀国白山本宮荘嚴講と在地社会

『尋尊大僧正記』に見える「吉崎」の検討

能登七尾城跡の調査の現状と今後の課題

第Ⅲ部 加賀藩研究の視点と史料

長氏と坂上大工

加賀藩二保村御料紙御用の実態

前田光高政権と隠居利常の関係

『太梁公日記』に見る加賀藩主前田治脩の政務

森田喜久男

三浦 純夫

西村 直亮

麦居 和真

道下 勝太

林 讓

寺口 学

石田 文一

木越 祐馨

善端 直

和田 学

袖吉 正樹

見瀬 和雄

加賀藩正室の行列と格式

深井 雅海

加賀藩前田家の戊辰戦争届書

根岸 茂夫

第Ⅳ部 近世の地域社会と文化

箱石 大

門跡寺院実相院の機能と構造

宇野日出生

元禄期幕府直轄領支配と代官手代

山本 英二

八王子千人同心株売買の変容

吉岡 孝

安房における伊勢御師師職争論と俳諧ネットワーク

笹川 裕

幕末期の上武地域における能登の漆掻き

佐藤 孝之

江戸神田祭最後の城内行列と将軍上覧

福原 敏男

内海四番御台場石材切り出し請負者妻の動向

安池 尋幸

明治期における西洋料理書の誕生とその意義

東四柳祥子

編集を終えて

東四柳史明さんの古稀を祝う会

本書は二四編という大部で、内容分野も多岐多彩にわたっており、第ⅠⅡ部を菱沼一憲が、第ⅢⅣ部を坂本達彦が分担することとした。それにしても、内容は両人の専門分野を遥かに凌駕しており、充分な書評にはおぼつかない。幸いにして編者である東四柳氏が、冒頭の「序」において、論文一つひとつに丁寧な解説を付しており、そのお力をお借りして記

述したいと思う。屋上屋となること、ご寛容願いたい。

一、第ⅠⅡ部について

第Ⅰ部は、ヤマト王権・律令国家・室町幕府など中央国家と地域にかかわる論考、第Ⅱ部は、史資料の分析・分析方法に重点を置いた論考が収められている。俯瞰してみると、「時代を超えた「地域史」の調査・研究に明け暮れてきた」と言及される編者の姿勢が、端的に示された構成・内容といえよう。

森田喜久男「ヤマト王権とコシ」は、文献史料を再検討し、ヤマト王権とコシとの関係を論じたもの。『古事記』など神話の時代、ヤマト王権のコシの認識は、イズモの彼方程度のもので、あまり関心は示されていない。やがて高句麗使節が漂着し、蝦夷との国境を接するという地理的な重要性が増すと、六世紀末には越国守が設置され、さらに越前・越中・越後へ分割されるなど、強く介入するようになる。氏はこうした変遷を、コシという大きなクニが、ヤマト王権により改編・分割されてゆく経緯ととらえる。

三浦純夫「能登邑知渴周辺の古代交通路」は、古代の邑知渴（おうちがた）湖面を復元し、所在地が確定されていない撰才駅の比定をこころみたもの。同駅は、邑知渴や河川に近い水上交通との結節点に設置されたと推定する。

西村直亮「南北朝期における八戸根城南部氏の動向」は、鎌倉末から南北朝期にかけての八戸南部氏の動向を、南部師行を中心に検討したもの。鎌倉末期の相論文書により、師行は得宗被官ではなかったことを明らかにする。また、北畠顕家の南部師行宛陸奥国宣状の内容を分析し、沙汰付・打渡、他の陸奥の在地領主との会合に関するもの、馬産に関するものに分類され、その活動実態を明らかにしている。ただし、顕家体制下での師行の活動が、鎌倉期の得宗被官・糠部入部によらないとするならば、いかに説明されるべきかが疑問。

麦居和真「管領家畠山氏の内訌と能登守護家」は、能登一國守護職を有し、管領家につぐ有力な能登守護家畠山氏について、応仁の乱の要因ともなった管領畠山家の内訌における動向を検討したもの。能登守護家（義忠―義統）は管領家から自立した立場にあり、管領家の家督相続に積極的に介入することはなかったが、管領家の支柱であった持国の死去という危機においては、管領家との協調を維持するという立場から、積極的な介入に踏み切ったとする。能登守護家の主家管領家に対する政治的自立性が、どこに立脚するのか、将軍との距離などを交えた説明がほしい。

道下勝太「中世加賀国長崎保の成立と領有関係」は、小松市域の荘園像を把握する一端として、長崎保をとりあげる。小松市長崎町付近に比定される同保は、日本海に面し、海岸

沿いの砂丘地帯上に集落が形成され加賀路が通る。その成立は領主である法勝寺の建立期と推測され、後に室町將軍の帰依を得た北野社松梅院禪親が知行したこと、また守護権力の後退により知行は不安定化してゆき、幕府を介しての本願寺勢力への働きかけがなされたとする。

次いで、第Ⅱ部。

林譲「『天文日記』の記号覚書」は、本願寺第一〇代門主証如の日記である『天文日記』に付された△▽などの記号の意味を読み解いたもの。記号は証如自身により付せられ、書札・音信の遣り取りを記号で示してある。この際、「此方」「家中」「他家」といった、証如自身を中心として広がるグループ分けが意識されている。やがて使用される記号の種類が増え、表現が複雑化するが、それは証如のグループ分けに関する意識の深まりを示すものとする。

寺口学「加賀国金津荘の荘域と相論」は、正安二年（一三〇〇）三月の関東下知状を基本史料として金津荘を分析したもの。同荘は賀茂別雷社領で石川県かほく市内に比定される。正安の下知状は、隣接する山門領北英田保との境相論にかかわるものであり、河北潟に形成された干潟の帰属が大きな問題となっていた。干潟は時代によって変化し、そのため荘域・境界も固定されなかったとする。

石田文一「戦国期の加賀国白山本宮荘殿講と在地社会」は、

白山本宮の社僧組織である「莊嚴講」の分析を通じて、戦国期における加賀国の社会状況の解明をこころみたもの。莊嚴講は白山本宮社僧の中核組織で、戦国最末期まで存続しており、経済基盤である免田経営を通じて在地社会と関係を持ちつづけた。本願寺・一向宗の台頭という状況の変化に対しても、国法を免田支配の根拠として導入するなど、時代への適応がみられるとする。

本越祐馨『「尋尊大僧正記」に見える「吉崎」の検討』は、蓮如退去後に後継者として吉崎に入った人物を、蓮如四男の蓮誓に比定し、教団の拠点としての吉崎について検討したものの。蓮誓を吉崎坊の留守に指名したのは、本願寺住持で長兄にあたる順如であり、蓮如による仏法再興の地たる同地を霊場とし、山科・大坂とならぶ教団の拠点となった。その結果、加州本願寺と称されたとする。

善端直「能登七尾城跡の調査の現状と今後の課題」は、石川県七尾市に所在する能登畠山氏の居城七尾城につき、石垣・城下町の鏡づくりなど職人にかかわる遺跡・物構などの考古学の成果の紹介と、それらによる城の変遷を述べて、廃絶期の見通しにせまろうとしたもの。

簡単ではあるが、第Ⅰ・Ⅱ部の論文を紹介させていたのだ。特に共通のテーマを設定したり、フィールドを限定したりせず、自由にテーマを採りあげつつも、すべての論文が実

証的で堅実な史料操作に基づいて立論されているのは、編者の学問の指向性を反映しているものであろう。よって諸論文を総括した論評は、あまり意味のあることではないと思うので、通読して感じたことを二点ほど記しておきたい。

一つは林論文でも強調されているように、『加能史料』の功績である。同史料集は論集の末尾の「編集を終えて」で言及されているように、大日本史料の体裁に準じて、石川県の古代・中世の編年史料集として一九八〇年から編纂が開始されており、東四柳氏は開始当初からその陣頭指揮をとり現在にいたっている。およそ自治体史は、まず資料編が編纂され、それに基づいて通史編がまとめられる。時折、通史編が先となる場合もあるが、その場合の叙述の難しさは、しばしば耳にするところである。本論集のほとんどの論文が、『加能史料』を母体として生み出されたものであり、同史料集は、歴史学の豊かな稔りをもたらず土壌であることを感じた。

もう一点は地勢の問題である。加賀国は日本海に面し、背後には巉々とした両白山地がそびえる。この間には平野が広がるが、前近代ではここには多くの潟が存在していた。邑知潟や河北潟などは、干拓以前は数倍の規模であったし、消滅した潟も少なくない。こうした潟は、日本海から吹き付ける強い北風と、深い山地と豪雪がもたらす河水の創造物であり、それに寄り添うように人々は生き、歴史を刻んできた。

本書の論文を拝読し、あらためてその存在の重要性を確認したところである。

二、第ⅢⅣ部について

第Ⅲ・Ⅳ部の論考が対象とする時代は、近世から明治後期までである。研究テーマは、Ⅲは主に加賀藩や加賀藩領関係、Ⅳは加能地域以外を対象とした地域史・文化史を中心としている。

和田学「長氏と坂上大工」は、入唐大工の家柄として、加賀藩における建仁寺流派普及に大きな足跡を残した坂上家について検討したものである。同家は長家に仕え、加賀藩御大工とも姻戚関係を持つ家柄であった。氏は、同家が前田利常の母の菩提寺の整備に参加したほか、近世初期に長家の始祖長谷部信連を祀る長谷部神社や、長連龍の三十三回忌を機に実施された東嶺寺の整備などに関わったことなどを明らかにした。また、同家は幕末期に至るまで作事方や普請方などを家業とし、拝領物を受けるほか、嘉永三年（一八五〇）には入唐大工の秘宝を伝える家柄として神事も務めたことを説明している。

袖吉正樹「加賀藩二俣村御料紙御用の実態」は、御料紙肝煎などを務める山田家の史料を用い、二俣村における御料紙御用の実態を分析したものである。同村では古くから紙漉き

が行われており、山田家は天正十一年（一五八三）、佐々成政軍の情勢を前田利家に注進し、その後、御料紙御用を命じられた由緒を持つ家である。近世の同村では藩主が公式の儀礼用に使った御料紙や、藩庁用の紙などを漉いていた。氏は、加賀藩による御料紙漉人に対する様々な助成、御料紙漉きにかかわる紙漉人の組織、御料紙生産の実態などを明らかにしている。また、歴代藩主も御料紙御用に関心が高く、紙漉きの視察を行なったことを指摘している。

見瀬和雄「前田光高政権と隠居利常の関係」は、藩政をめぐる四代藩主前田光高と隠居利常の関係について、年寄奥村易英が書留めた「万跡書帳」を用いて考察したものである。まず、利常による献上用の鷹の取り寄せに藩士を使用したことや、キリシタン改めへの関与などを検討し、統治原理よりも前代に取り結んだ主従制原理の方が強く働いたためと指摘する。また、利常は隠居後も金沢・富山・大聖寺藩の藩主の上に超越的に君臨する家長としての姿を確認できるが、光高の領内の問題について公然と介入することはなく、側面から支援していたと評価している。

深井雅海「『大梁公日記』に見る加賀藩主前田治脩の政務」は、前田治脩が十一代藩主に就任し、初めて国元に帰国する時期に、彼を補佐した人物や、政務を行う上で接触した人物を検討した。治脩の政務を支えたのは前藩主重教や、側近で

取次役の「御用部屋」であることを究明した。また、治脩は月番年寄・勝手方年寄と頻繁に面会したこと、年寄の合議を重んじたが、財政問題については主導権を発揮し、勝手方年寄とともに大坂仕法改定を行ったことなどを明らかにしている。

根岸茂夫「加賀藩正室の行列と格式」は、將軍家斉の娘で前田家に輿入れした溶姫の江戸城登城の行列を素材に、女性の行列の構造を考察したものである。溶姫の行列は、大名行列のように軍事的な構成を取っていないこと、女性は全て乗り物に乗って、男性に担がれ囲まれていることなどを明らかにした。後者については、男社会に閉ざされた大奥社会を象徴していると評価している。また、『徳川盛世録』の溶姫の行列挿図は、実態とは異なることを解明した。

箱石大「加賀藩前田家の戊辰戦争届書」は、加賀藩の戊辰戦争届書の利用と伝来を分析したものである。届書の大部分は『太政官日誌』掲載のものであり、ここに掲載されたものは京都詰(留守居役にあたる間番であることが多い)が維新政府の弁事役所に提出したもので、『北征日誌』掲載の届書は越後本営方が越後口総督府に提出したものであることを明らかにした。さらに、明治維新後に兵部省の命で加賀藩が作成した戦争届書は、本営方役人から各総督府に提出されたものを基にしたと指摘している。

宇野日出生「門跡寺院実相院の機能と構造」は、京都市左京区にある天台宗の門跡寺院実相院について、同院が維持・管理する配下の大雲寺を分析し、地域社会との関係を究明したものである。大雲寺は鎮守社石座神社を通して岩倉村の祭祀に関わるほか、寺院の維持管理のため京中の諸人を相手に金融業を展開した。また、十八世紀中頃以降、大蓮寺には精神治療を願って参籠する人びとがおり、彼らを相手に行った宗教行為も収益源であった。介抱人である強力による問題行動があったため、十八世紀後半に不法行為を取り締まる請書を提出させ、参籠療養寺院として一定の整備を行ったと評価している。

山本英二「元禄幕府直轄領支配と代官手代」は、信濃国筑摩郡今井陣屋代官手代の活動実態を明らかにし、中間支配機構論に代官所や手代も視野に入れる必要性を提起したものである。当該期に進展した土豪型代官から吏僚型代官への編成替えの過程で、在地有力者から登用された手代も在地性を払拭され、それにともない代官所支配を補完する中間支配機構が求められたと述べる。また、当該期には有力百姓が代官所の業務を請け負う部分があり、この負担軽減のために年番交代の中間支配機構が展開していく、と十八世紀以降を展望している。

吉岡孝「八王子千人同心株売買の変容」は、千人同心株が

遠類以外にも売買されるようになり、金銭売買の対象という概念が成立した十九世紀段階の株売買を検討した。当該期の千人同心株入手には、①株譲渡人とその関係者、②株被譲渡人とその関係者、③公式の立入人、④非公式の立入人、⑤千人同心組頭が関わっていたことを明らかにした。さらに、株売買による利益追求を安定させるシステムが形成されたのは、身分制が形骸化して貨幣システムが近世の生活空間に浸透した帰結であると評価している。

笹川裕「安房における伊勢御師・戦争論と俳諧ネットワーク」は、伊勢御師の活動と地域の関係について考察している。文化期に内宮の御師が、外宮御師の旦那場である安房に侵入を試みると、その拒絶を指示する廻状が回った。氏は、この差出人が当該地域における俳句の連のリーダー的人物であることを解明した。また、内宮の御師も当該地域の著名な俳人から、内宮の配札に関して依頼したことも明らかにした。以上から、内宮・外宮の布教活動に対する地域の対応の背景に、俳諧ネットワークによる有力者間の結びつきの存在を想定できると展望した。

佐藤孝之「幕末期の上武地域における能登の漆掻き」は、嘉永七年（一八五四）に発生した窃盗事件を題材に、能登国から上野国にやってきた漆掻きの活動と実態を検討したものである。能登国和田村漆掻き吉三郎が容疑者と疑われた窃盗

事件と横領事件を分析し、吉三郎に関わる人々との関係や漆掻渡世の実態を解明した。さらに、吉三郎の所持品検査によると、羽織や草双紙も所持しており、出稼ぎ人であっても貧困層ではないことを指摘した。また、他の能登出身漆掻きと比較し、出稼ぎ先での滞在期間などは漆掻きにより異なることも明らかにした。

福原敏男「江戸神田祭最後の城内行列と将軍上覧」は、安政六年（一八五九）の神田祭を検討した。まず、幕府側の指示を分析し、幕府は將軍代替わりと市中景気活性化のため盛大に行うように命じる一方、專業の歌舞伎や舞踊・音曲関係者の雇用と、異国人の見物を禁止したことを明らかにした。次に『斎藤月岑日記』と『藤岡屋日記』から、神田祭の周到な準備と、様々なトラブルを紹介した。さらに、祭礼行列の全体像と、附祭の内容や行列中の位置などを究明している。

安池尋幸「内海四番御台場石材切り出し請負者妻の動向」は、書簡を素材に幕末期の夫婦関係について検討したものである。自宅を離れ御台場築造用土丹石切り出しに関わった、武蔵国久良岐郡磯子村年寄堤磯右衛門と、妻との間で遣り取りされた手紙を分析し、妻は夫の仕事内容をよく理解しており、村内の人間関係も踏まえた行動を取っていたことを明らかにした。手紙の内容には儒教的な内容も、近代的女性の感性も見られず、このような夫婦が当時としては普通であった

可能性があると指摘し、当該期の夫婦関係を分析する際は、妻も含めた生活動向と、夫婦が現実にとのように対処しようとしたのかを説明する必要があると問題提起している。

東四柳祥子「明治期における西洋料理書の誕生とその意義」は、明治期の「西洋料理書」の成立と展開を論じたものである。「西洋料理書」成立の背後には、強壮な身体作りと、西洋人との交際力を高めるための西洋式食事作法の習得という、国策的意向が反映していたことを指摘した。「西洋料理書」の内容は時代とともに変化し、当初は肉食の長所を指摘するが、次第に西洋料理の滋養分の高さをうたい、家庭での西洋料理の調理をすすめる、家庭向けのものが出版されるようになったことを明らかにした。また、新しい家族関係構築を目指す、家庭改良書としての機能も期待されるようになったことを解明した。

以上、簡単ではあるが第Ⅲ・Ⅳ部の論文を紹介した。研究対象は加賀藩・加能地域に限らず、内容的にも政治史・経済史・地域史・文化史など多岐にわたる。個々の論文は、明確な課題意識を持ち、それを解明している。加えて今後の課題も述べていることから、さらに研究の広がりが期待されるものばかりである。ぜひ、直接手にとって一読していただきたい。

「編集を終えて」には、編者の東四柳氏のエピソードが多数

記され、ここを読むだけで氏が多くの後輩や教え子に敬慕されていることがわかり、読み応えがある。最後に氏の益々のご健勝と、さらなるご活躍を祈念して、新刊紹介の筆を置かせていただく。

(二〇一七年二月刊、A5版、四六六頁、同成社、定価九八〇円＋税)

下坂守著 『中世寺院社会と民衆』

杉山一弥

本書は、比叡山延暦寺（以下、山門）とその寺院社会に深く関係する近江・京都の民衆の歴史的役割を考究した学術論文集である。下坂氏は、先著『中世寺院社会の研究』（思文閣出版、二〇〇一年）において、山門の組織と構造を解明するきわめて重厚な研究成果をうみだした。そして、一般向けにも『京を支配する山法師たち』（吉川弘文館、二〇一一年）を著し、山門研究の重要性和魅力をあらわした。また氏は『描